円山応挙「群仙図」（亀岡市・金剛寺蔵）にみる画譜と観相学の学習
―18 世紀の仙人図流行のなかで―

杉ノ原朋加（鳥取県立博物館）

円山応挙（1733-1795）による「群仙図」（12 幅、天明 8 年[1788]、以下本作）は、当初応挙が幼少期に奉公をした金剛寺（亀岡市）の本堂障壁画として制作され、画業後期の代表作として知られる。本発表は描かれた 11 人の仙人の図様形成の分析を通してその特徴を明らかにすることで、本作の位置づけを試みる。

パトロンであった円満院祐常（1723-1773）の雑事録『萬誌』では、応挙が中国人物を描く際、服制を画譜に学び、顔貌に観相学を用いたと記される。本作にも有賀茜氏が日中の画譜の影響の可能性を示し、佐々木丞平氏が「観相学的、骨相学的関心」を指摘する。これら先行研究を踏まえ本発表では以下の諸点を指摘する。

第一に、基本となる仙人の図様に複数の画譜との類似が指摘できる。老子や黄初平と『有象列仙全伝』（1600 年刊）の挿絵との類似が例に挙げられるが、応挙の手控えである「写生雑録帳」（個人蔵）には同書の挿絵と本文の写しが見られ、軸装を中心とする実作品には同書と図様の類似が確認できることによって同書の利用を確かめられる。応挙はこうした画譜に学びつつも、モチーフの加筆と改変、伸びやかな筆致への変化、豊かな表情の付与によって画譜の図柄を改変し、自身の画風に消化して活用している。

第二に、顔貌には人物像に合わせて観相学が当てられる点を指摘できる。佐々木氏は「写生雑録帳」と応挙原画の絵手本『人物描写図法版本』にある観相学の図に着目し、実際に「王羲之図」（大乗寺蔵）に観相学が利用されていること、その背景に 18 世紀観相学の流行があったことを指摘した。発表者は新たに手控えの記述が和製相書『相法無尽蔵』（1797 年刊）と類似することを指摘し、同系統の相書の利用の可能性を提示するとともに、応挙と観相学の関係を改めて整理し、実態の把握を行う。そのうえで本作を分析すると、たとえば聡明な人物として知られる呂洞賓に貴相の「龍眉」や「鳳眼」、「仰月口」、耳の毛などの観相があてられることで人物像の明確化に成功している。それには仙人画譜の記述から人物像を学んだ経験が活かされたものと推定できる。

以上の図様成立の背景は、応挙の絵画理念に加え、仙人図という画題の同時代の受容に求められる。日本において中世水墨画に始まる仙人図は、近世以降吉祥性の明確な明清の仙人図の増加や、『有象列仙全伝』および『僊仏奇踪』（1602 年刊）の仙人画譜の普及によって、応挙が活躍した 18 世紀には多彩な様相を呈し、多くの画家が特徴ある仙人図を手掛けた。応挙の場合は上流階級を中心とした支持層の需要があったと見られ、画業初期から盛んに仙人図を制作する中で、画譜の図に観相学を組み合わせて吉祥のアイコンとしての現実性と理想美を表した応挙ならではの新しい仙人を確立していく。本作はそうして確立された画風が障壁画という大画面に展開した仙人図の集大成と位置づけられる。